

「シンデレラ」三態

—— 比較民話学試論 ——

阿 達 義 雄

Three Types of "Cinderella"

—— A Study in Comparative Folklore ——

By

Yoshio Adachi

I 序 言

最近、小学校国語読本の中の童話教材を調査している中に、西欧や印度の民話の発想が、わが国のそれとは、非常に異なっていることに興味を感じるようになった。

今迄の民話の研究は、些末な相違点を捨象して、その大同に眼をつけて類型を求めたり、史的発展を溯って、その源泉を尋ねたりすることに、重点が置かれていたように思われるが、民話の研究も今迄とは全く観点を変えて、世界的視野から自国の民話を見直したり、世界各国の民話を資料として、それぞれの民族性や民族文化の特性を明らかにする必要があるのではあるまいか。即ち、各国の民話の中に、その民族の心情と文化とを探り、これらを比較考察してみたいというのである。

それには、国々の民話において、異なっている点を比較してみるものが考えられ、それによって、それぞれの民話と民族の特徴が、対照的に際立って明らかにされるはずである。

これは、外国人の眼をもって自国を見直すという近頃の傾向にも相通ずるものであろう。

それで、私は先ず現在一般にも、よく知られている《シンデレラ》を手始めに採りあげてみたのであるが、フランスのペローの《シンデレラ》とドイツのグリムの《シンデレラ》とでは、非常に異なっている点のあることを知って一驚し、更にこれを、日本のシンデレラ系の民話「栗福米福」型の多くの類話と比較してみて、ここにも幾多の問題のあることを発見した。

この考察は、一般に童話という名目の下に、切り捨てられて顧みられなかった部分に特に注目して、最近の訳本によって試みたものであり、ここに採りあげたペローの『サンドリョン』の出版は、1679年で、グリムの『灰かぶり』の出されはじめたのは1819年であって、前者の出版はわが国の元禄時代、後者の出版は化政時代に相応することを附記する。

II 時 点 と 地 点

グリムの『灰かぶり』は、神話の痕跡を残しているメルヘンの代表的なものであり、ペローの

『サンドリヨン』は、十六世紀の頃既に全ヨーロッパに広まって、子供達に愛好されていた民話だが、ペローによって、当時のフランス人の嗜好に合うように、素材の取捨選択が加えられ、著しくフランス人好みに、劇的に改められている。

勿論、グリムの『灰かぶり』もドイツ流の層々相重ねるような構築的手法が目立ち、ペローの『サンドリヨン』の宮殿の舞踏会を中心とした簡潔明快なストーリーの中に、ルイ王朝の風俗をちりばめた想像性の豊かな、怪しい色彩感の溢れた幻想的な作と好対照を成している。

ペローの『サンドリヨン』を、文学的に考えた場合、その面白さは、発端を極めて簡潔に叙した後、宮殿の舞踏会に招かれた姉達のほしやいでいる情景を、ルイ十四世当時の流行の反映のうちに描き出し、この現実的風俗に対して、仙女の魔法の杖を以て、月光の中を輝いて走るような六頭四輪馬車を、連想的手法によって仕立て上げ、印象的ファンタジーの世界を宮殿内に繰り込むところにあり、舞踏会については、姉達の眼に映じた羨望礼讃的な情景が、帰宅後の彼女等の誇らしげな会話によって、台所にいる、みすばらしいサンドリヨンの自信を益々盛り上げて、第三者の痛快感を唆しているところにある。

なお、プロットの上から言えば、仙女から言い渡された夜中の12時が、伏線となっていて第2夜のサンドリヨンを、時間切れの瞬間に追い込み、片っ方の上靴を階段に残して脱走するという一頓挫の形で、サスペンスを形成し、この危機が即ちサンドリヨンの幸福を招来するのであるが、その僥倖さを一層際立たせ、クライマックスを昂めるために、サンドリヨンを後に廻し、先ず二人の姉に上靴を履かせようと試み、上靴がサンドリヨンにぴったり合った直後に、更にサンドリヨンが他の片っ方の上靴を出して履いて見せて、高慢ちきな姉達を驚かした上にも驚かすという所が出色であり、この辺が心理的のクライマックスとなっているが、劇的な動作のクライマックスは、その次の瞬間⁶⁾にあって激情的な和解をもってされている。

一般に、民話の大きな特徴として、3回ずつ同じようなシーンが繰り返されると言われている。これをグリムの「灰かぶり」についてみると、3日続きの舞踏会の3回反復だけではなく、榛の木の小鳥への衣裳の所望の3回、シンデレラに対する王子の3回の追跡、或いは、足を靴に入れて試みる3回、更に3人の娘が馬に乘せられて連れて行かれる3回の繰り返し、3回繰り返される家鳩の歌など、みな丹念に省略なく叙述されていて、それらのシーンも殆んど似ているので、ドイツ的な几帳面さと《しちくどさ》が感じられるとともに、一種の構築的な重畳感を醸し出している。

然るに、同じ素材に拠る民話であっても、ペローの「サンドリヨン」においては、同一の情景の繰り返しの全然見られないのが特徴であり、舞踏会が2夜にわたっており、仙女のマジックも2回にわたっているはずであるのに、2回目は至極簡単に述べられている。

即ち、初回の仙女のマジックについては、かなり詳細に述べられているが、2日目のことは、「あくる日も、2人の姉さんは、舞踏会へ行きました。サンドリヨンも行きましたが、きのうよりも、もっときれいな服装をしていました。」とあるだけで、これについては、第1日目の印象的描写によって、万事読者の想像にゆだねられている。

サンドリヨンの強く意識していた舞踏会の刻限も、第1夜は、12時15分前で、第2夜のそれは、夜中の12時となっているが、これについての情景は、全く異なっているので、反って期待感を抱かせられるようになっている。

又、2人の姉が上靴を履いてみる情景には、グリムは、数十行の文を連ね煩をいといわぬのに対し、ペローは、ただ「2人はなんとかして、足を靴に入れようと、いろいろやってみました、どうしてもはいりません。」と簡単に片付けている。

要するに、ペローの筆は、最初の記述や描写を新鮮に印象的にして、同じ事態の記述や細部の

点は読者の想像力に訴えて、簡潔な文を以てし、行と行との間は、イマジネーションの力に依存しようとするものであろう。

次に作品構成の中枢を成している重点を考えてみると、ペローのそれは、12時という時点を中心として、前後に光芒を曳き、その時前の事態は、その一点に向って展開し、その時後は、その時、即ち夜中の12時の所産である片っ方の上靴の解明という一点に絞られて、煩雑な小印象の派出を抑えて、簡潔に、しかも明確に含蓄ある筆致を旨としている。

その途上において、似たシーンの旋回や反復を避けているのは、人々に想像の余地を与え、全体のポイント、ポイントを鮮明にして、印象の混濁を嫌っていたからであろう。

従って、劇的效果は、これによって発せられ、全体的に見ると短篇小説的の趣を呈している。

ペローが12時の時を中心として、印象の純一明快を意図して反復を避けているのに対し、グリムの『灰かぶり』には、執拗なまでに、あまりにも屢々《行きつ戻りつ》している点が見られる。それは榛の生えているシンデレラの亡母の墓という1つの地点、場所であって、事態や文章の反復重畳は、これを中心として起こり、前後凡そ9回、すべてこの地点との関係において決せられ、全編は、これによって螺旋状に反復低徊的に展開し、この地点は、執拗にシンデレラを虐待し、いじめ抜こうとする継母や姉達に反発し対抗する爆撃基地の感がある。

即ち、2回にわたる継母からの難題も、これあるがために解決され、舞踏会に行くも帰るも、此处により、《靴さばき》もここを通ることによって裁定され、大団円において、二人の姉を膺懲する2羽の鳩も、ここを基地として飛び立っている。

Ⅲ ファンタジー

私共が民話において、特に興味を感じるのは、そこに現出される Fantasy の世界であり、現実的制約を離れた想像力によって、民衆の願望が、どのような形によって現わされているかということである。特に、これが《魔法》とか、《打出の小槌》《宝の小箱》などによって、願望する物が出される場合に、同じ型や似たストーリーの世界各国の民話において、如何にその欲求願望が異なっているかが見られるだけではなく、出された事物に、その地方の local colour や国々の風俗・文化の反映が見られ、延いては、それらの比較参照によって、それぞれの国民性や国民的嗜好などが明らかにされるということである。

このシンデレラ型の民話の魔力について考えてみるに、フランスのペローにあっては、仙女の魔法の杖、ドイツのグリムにあっては、亡き母の霊の使徒とも考えられる小鳥や鳩であり、日本の民話にあっては、その心がけの良さによって偶然手に入れた打出の小槌や宝の小箱などの場合が多い。

この打出の小槌や宝の小箱などは、これを手に入れた者が「無」から「有」を生じさせようとして、奇跡的にポンポン打ち出すのであるから、実に素朴的であり観念的である。例えば、宝の小箱を叩いて、欲しい物を願うにしても、単に「いいきもん出れ。」とか「赤いきもん出れ。」などとあって、具体性を欠いているものが突如として出てくるからであって、これは赤い着物とは云っても、ただ赤い色の着物ではないはずである。

これにくらべると、ペローの《サンドリオン》にあっては、仙女を登場させて、いかにもマジックらしく、魔法の杖をもって、それが触れたありふれた物を、忽ちにして、人目をそばたさせるような華麗にして幻想的なものに変化させている。そして、その変えられた物も、元の物と全く無関係なものではなく

◎南瓜の中味を取って→金色に光る四輪車

◎六匹の廿日鼠→六頭の白い鼠色の立派な馬

◎立派な髭の生えている鼠→立派な口髭をはやした御者

◎六匹のトカゲ→金モールの服を着込んだ六人のお供

という風に、その色彩か形態か或は数量の方面からの連想的効果によって巧みに快く、人々をして魔法の夢幻的世界に誘い込んでしまうのである。

では、ドイツのグリムのマジックはどうかと考えると、《サンドリヨン》の仙女、《栗福米福》の宝の小箱（又は打出の小槌等）に相応するものは、シンデレラ（灰かぶり娘）の願いに応じて出てくる小鳥や鳩であって、これは宮殿の舞踏会の日になって、突然飛び出してくるものではなく、前々から榛（はしばみ）の木に棲んでいたものであり、その榛というのも、父に頼んで、特に土産として貰った若枝を母の墓に挿し、そこに注いだシンデレラの涙によって育てあげたものであり、この背景には、母が臨終の時に言い残した言葉、

- ・「いつまでも神様を大事にして、それから気だてをよくしているのですよ。そうするとね、神様は、いつなときでも、おまえを助けて下さるし、かあさんも、天国からおまえを見おろしていて、おまえのためを思ってあげることよ。」

という言葉に対する素朴な絶対的な信仰がある。すなわち、この亡母の言葉を信じ、シンデレラが粒々辛苦して育て上げ、自分を迫害する者のあった時の急に備えていたものである。

露骨にいうならば、シンデレラの困った時には必ずその小鳥や鳩が動員されている。

日本やフランスのこの種の民話の場合、最初に手に入れた magic power は、ヒロインの意志とは関係なく、彼女を哀憐する者が他律的に彼女に与えたものである。しかるに、ドイツの場合は、母の臨終の言葉に縋ってではあるが、シンデレラの意志（祈り）によって生み出したものである。すなわち、その念力の表現であるとも見られよう。

そして、シンデレラの願いによって、その難局が屢々救われるのであるが、舞踏会の日には榛の木から、いつもの鳥が落としてくれたものは、

- ・（第1日目）黄金と白銀の糸で織った衣服と絹糸と白銀でべた一面に刺繍のしてある上靴。
- ・（第2日目）前の日よりずうとずうと立派な、どっしりした衣服。
- ・（第3日目）世の中の人々が未だ一人も手に入れたことのないような、それはそれはすばらしく美しい、光り輝いた衣服とのこらず黄金の上靴。

であり、これらを一言で尽くすならば、豪華な金目のあるものということになるであろう。

これに対し、フランスのペローの《サンドリヨン》で、これについて具体的に記されているのは、

- ・仙女はすぐに、ちよっと杖で、サンドリヨンに、かるくさわりました。すると、たちまちサンドリヨンの服は、宝石をちりばめた、金糸銀糸の服にかわりました。つぎに仙女は、この世のものとは思われない、きれいなガラスの上ぐつを、一足くれました。

上の一丈だけであるが、このサンドリヨンの姿の背景となって対照的に彼女を引立てているのは、ルイ14世の頃の宮廷のサロンにおける貴婦人の風俗を潤色したと伝えられている次のような二人の姉達の華美な服飾であろう。

- ◎あたしは、赤いビロードの服を着て、イギリス風の飾りをつけるわ。
- ◎あたし、普通のスカートにするわ。でも、そのかわり、金の花模様のマントを着て、ダイヤのブローチでとめるわ。
- ◎上手な美容師を呼んできて、髪を二列に高く結いあげました。一流の店のつけほくろを買いにやらせました。
- ◎からだを細く見せるために、あまりきつく紐をしめたために、12本も紐をを切ってしまいまし

た。

これ等の中でも、特に注意すべきは、この頃にはじまった新奇な流行の⁽⁶⁾《つけばくろ》と、これも当時の流行として、腰を細く見せようと苦心していることであろう。

このような流行を追っていた多くの婦人の中にあっても、断然、彼女等を圧倒してしまったことは、次の文によっても知られるのである。

- ・すると、この誰も知らないお姫様のあまりの美しさに見とれて、みんな、しいんとしずまり返ってしまいました。踊っていた人達は立ち止まり、バイオリンを引いていた人達も、弾く手をとめました。
- ・ご夫人がたはみんな、サンドリヨンの髪飾や服装を、じっと見ていました。あしたになったら早速、あれと同じような服地をさがし、上手な仕立屋さんをみつけて、同じようなものを作らせようと思っていたのです。

これは、流行に鋭敏なフランスの上流社会の姿をよく映し出しているものであって、この民話の特徴となっているものであるに拘らず、これを些細なものとして、多くの再話は抹消したり、省略したりしがちであった。

なお、相沢博氏は、その著『メルヘンの世界』において、——メルヘンの人物は内面的な深みも厚みも、もち合わさず、外からの刺激を受けて筋の線を、ひたすら動いてゆく操人形のようなもの——であると述べられているが、ペローの《サンドリヨン》の中のサンドリヨンの挙措や言葉などから考えてみると、サンドリヨンは民話的な操人形ではなく、優れた趣味と美德をもった女性として描かれている。

すなわち、舞踏会の服装について姉達から意見を聞かれたり御者を何でこしらえようかと苦心している仙女にまで適切なアドバイスを与えたりしているばかりではなく、宮殿の舞踏会で、王子の相手がサンドリヨンであったことを知らない姉達に対して、「あたしも、その方にお目にかかれなしかしら？」などとトボケて、姉に「黄色な服を貸していただけないでしょうか。」と、軽くからかってみる心の余裕をもっている女性であるが、自分が王子の妃と決った時には、今迄の姉達が自分をいじめたことを許して、

- ・ふたりの姉さんも、舞踏会でおめにかかった美しいお姫さまはサンドリヨンだということがわかりました。ふたりはサンドリヨンの足もとに身をなげだして、いままでいろいろとひどいめにあわせたことをわびました。サンドリヨンはふたりを立ちあがらせて、キスをしながら、心からゆるすといい、これからもずっとなかよくしましょうといいました。

というような、やや理知的ではあるが、根は純情な面白い女性として描かれていて、その優れているのは、容貌・衣服のような外面的な美に限られてはいないのである。

従って、サンドリヨンの中に見られるフランス女性鑑的要素が、薄っぺらな姉達のお洒落れや高慢さと対照されながら全編の筋が進められているように思われる。

又、ペローの、この継母も高慢で気位の高い婦人という程度のものであって、グリムのシンデレラの継母のように、飽く迄も継母をいじめ抜こうとする気配は見られない。すなわち、サンドリヨンの継母は舞踏会前後において、サンドリヨンに無理難題などを課してはいないのである。

わが国の昔話の『栗福米福』は、シンデレラ型の話とされているが、ペローやグリムのような著名人によって改作されたものではなく、多くは語り婆（ばさ）の語気を伝えて、方言のままに記され、文飾の加えられていないのが一般であって、文章、内容、ともに非常に素朴である。

中でも、特に素朴なのは、水沢謙一氏著の⁽⁷⁾『おばばの昔ばなし』の中に収められている《おたまとおつぎ》の話であろう。この中に出てくるお玉はシンデレラに当たり、おつぎというのは継母の実子である。

このお玉は継母に破れた袋を持たせられ、良い袋を持たせられたおつぎと一緒に、山へ栗拾いにやられた。おつぎだけが早く袋いっぱい栗を拾って家へ帰ったが、お玉はなかなか栗が溜らないので、唯一人残され、山の中をさまよっているうちに炭小屋に辿りつき、そこで死んだお母さんに逢って、一晚泊めて貰った上に、破れた袋を縫って貰い、更に、頼めば、何でも好きな物の出てくる宝の小箱を貰って家に帰ったという前置きの話が述べられ、愈々話が本筋に入ると、祭の日のこと、継母が実子のおつぎにだけ晴着を着せて祭見に連れて行き、お玉には留守居仕事に石臼を挽かせていたのであるが、お玉も何とかしてお祭見に行きたがっている。この辺から以下を文その儘に引用してみると次のようである。

・ある日、おまつりのドンドンかぐらを見にいぐとて、おっかさんのごけは、おつぎばかりつれていぐてが。

「おたま、お前はきものがないすけ、そっらすけ、うちでるすいしていれや。お前は、るすいしごと(石うす)にイススをひいていれや。」

そういうたてが、ほうして、おつぎにいいきものをきして、いいかんざしをさして、いいおびしめさせて、いいげたをはかして、おつぎをつれていがしたてが。

ほうして、おたまは、しかたがね、るすいしてイススでこなひきしていた。

「ああ、おらも、ドンドンかぐらを見にいぎたいどもに、きものもないし、なんでもないがに。」とおもていたれば、死んだおっかさんからもらた、なんでもすきなものが出るちんこいはこのことを思い出したと。ほうしたれば、そこへ、また、死んだおっかさんが、としよりのばさになってこらしたと。

「おれが、イススひいてくするすけ、(おまえ)ンな、ドンドンかぐらを見にいってこいや。ちんこいはこにたのんで、いいきもの出してきていげや。」そういわしたと。そりゃんだんが、おたまは、「いいきもの、出れ。」そういうて、ちんこいはこではたいたと。

ほうしたら、のう、まあ、ここらにない、きれいなものが出たと。ほうしてまた、「いいおび、出れ。」「いいたび、出れ。」「いいげた、出れ。」「いいかんざし、出れ。」そういうて、はたいたれば、ンな、出てきたと。

ほうして、おたまは、いとしげな、きれいな娘になって、ドンドンかぐら見にいったてが。ほうしたれば、人が、ンな、たまげて、「こんげの、いいきものをきた、こんげの、いとしげな娘、まあ、ここらにいねが、どっからきたろう。そういうて、見ているてが。

ほうして、ごけとおつぎも、たまげて見てるてが。

「あの娘、おらちのおたまに、にてる。」と、おつぎがいうども、おっかさんは、

「そんげんなことはね。おたまは、あんげんいいきものも持っていねし、うちで、るすいとし(つゝ)てはずだ。」というたてが。

ここでは、宝の小箱を叩いて、「いいきもの出れ」「いいおび出れ」などとなっているが、この類話(8)を調べてみると、もう少し具体的に表現したものでも、特に素晴らしい着物ということ強調する場合には、みな「赤い着物出れ」というように、「赤い」という形容詞をつけているくらいのもので、殆んど他の色が出てこない。

なお、多くの越後民話の粟福米福型の話によって、このような場合に、何を所望しているかと調べてみると、それ等の大部分は、いいきもん・いいおび・いいかんざし・いいくし・いいたび・いいげたなどであって、特に庶民的であり農民的であると感ぜられるのは、「握り飯」「ぜん(銭)」などが所望されていることである。尤も、中には、どうせ頼むのならば、大きく出てやれと、自分の乗って行く駕籠や駕籠をかつぐ若衆を呼び出している娘もあり、更に、もっと気の利いた娘になると、先ず若衆や女子達を出して餅をつかせたり、寿司や饅頭を沢山こしらわせて、

祭り場迄運ばせ、そこで大勢の村の者にバラ撒いてやり、豪遊気分を満喫している娘もあって、これらにおいても、その素朴さや農村の大気取りが窺われる。

着物については、単に「いい着物」とか、「赤い着物」などを望み、具体性を欠いている中にあって、栃尾地方に伝えられている話の中の「ちりめんのいいきもん一そろい、金や銀の模様のあるばかげにきれいなきもんがバサンバサンと出てきたてや。」というのが、やや具体的な描写として注意される。

なお、これに関連したものであって、特に変わっているのは、岩船郡の熊田・雷・大代・小俣などに伝えられている話で、みな、《十二単衣》や《青葉の笛》などを所望している。これは、勿論、昔話の語り人の意識によって加わったものであると考えられるが、これがみな新潟県の僻地に限られているから妙である。これは、この附近の三面部落の平家の落人などからの連想によるか、或は方言圏論的な現象であろう。

又、各地の多くの話では、「ぜん出れ」「巾着出れ」「小遣出れ」などと頼んでいるので、その地方の日常生活のことが窺われるが、ただ、村松藩の牧部落の中に「小判出れ」と願っているのに注意される。

Ⅳ 上靴と履物

これらのフランスやドイツの民話と日本の粟福米福型の昔話を比較してみると、西洋の方ではダンスパーティーなどがあるために、若い男女の接触が直接的緊張関係におかれているのに反し、風習の相違から、日本では、祭とか芝居とかいうような、人の大勢集まる時を利用して、やや離れた所から見るとか、或は親が見て気に入ったというような間接的接触であり、微温的執心の程度のものが多い。

従って、その時に見た着物とか、ウロ覚えの顔容などが唯一の証拠となっており、わが国の民話では、特定の者にだけ、ぴったりと嵌る靴のようなものが焦点的契機として採り上げられていないために、西欧の話のようにクライマックスが劇的に高揚せず、愈々という決定的な場面において、娘の母から、その日芝居見に行っていたのは妹（継母の実子）の方だから、妹を貰ってくるように強要され、中には、更に嫁定め基準として、歌の競詠などというものが採り上げられたりしているものがあり、肝心の若者の意志・情熱の影が薄くなっている。これは近世における我が国の嫁選びの一般的習慣を反映しているものであろう。

この型の日本の民話の中に、若い男と娘の接触のあったものにしても、極めて淡白で、
●ベンズルが、あんまりきれいだんだが、あるかねもちのむすこが、「ここがあいてるすけ。ここへあがれや」と、さじきの上にあげてくれたと。（東頸城・松代町松代「ベンズル、カゲズル」）
上のような程度に過ぎない。

従って、この民話において、問題にされるのは、継母が芝居に連れて行ったのは、その実子の妹の方であって、姉は家で留守居仕事をしていたはずであるという点であり、姉は然うではないということをはかによって証明しなければならないのである。

前に示した《ベンズルカゲズル》に拠ると、この証明は、次のように、宝の小箱から、芝居見物に行った時の着物を出して着て見せるということになっている。

●それから、しかもたって、松代のかねもちのだんなさまがきて、「このうちに、こないさ、町へしばい見にいった、きれいな娘がいる。おらこのせがれのよめにくれ」というた。

ほうしたら、おっかあが、「そら、カゲズル、お前だ。」といいきもんをきせて、だんなさまの前に出したと。だんなはよく見て、「いや、この子じゃない。」「しばい見にいていた

のは、この子だ」「いや、たしかに、もう一人いるすけ、その子を出してくれ」

ほうしると、おっかあがにっくがって、「ベンズル、そら、ンなだって、ここへ出てみろ」というたら、ベンズルは、小箱から、しばい見にいったとおんなじいきもんを出して、きれいなあねさになってきたと。

「ああ、この子だ。これをよめにくれ」と、だんなさまがいうて、よめにきまったと。

(東頸城・松代町松代「ベンズル、カゲズル」)

これと同じような例は、古志郡山古志村小松倉の民話《こめぶく、あわぶく》の中にも見られるが、このような悠長さは、近世の日本でも都会的なものではなく、地方的なものである。

然るに、ペローやグリムはヒロイン自身でなくて、ぴったりと履かれない個性的な靴を持ち出して、読者の注意の焦点を、この小さい物の一点に絞ったのであった。ペローは、その前に時間的には、夜の12時という一点に注意を集めさせ、この時点が過ぎると、後に残された片っ方の上靴を第2の焦点とするというように、読者の注意を何らかの際立った一点に集中させようとしていたものと思われる。

ただ、日本民話の中でも、越後の南魚沼郡六日町上楽師に伝えられている話があり、これがグリムの《灰かぶり》の話に非常によく似ている点に注意される。その類似点は、

- (1) ヒロインたる「あわぼこ」が、あまり急いだために、「はきもの」を片っ方脱ぎ放したということ。
- (2) 履物に足を合わせてみて、これに合わない「こめぼこ」の足をカミソリで切ろうとすること。
- (3) 「あわぼこ」の足が、この履物にすっぽり履かれたということ。

それで、次に、この《あわぼこ・こめぼこ》の中からグリムの話に似たところを抄出してみると、

- そのとき、若い殿様があわぼこを見ていられて、あのいとしげな娘を嫁にほしい。「どこの娘かしらべてみてくれ」とけらいのしゅにいうた。けらいのしゅが「にしは、どこのうちの娘だ」って、あわぼこにきくんだんが、あわぼこは、これはおおごとだと、かごかき若いしゅに、「はやく、うちへいこう」そういうで、あんまり急いで、はきものをかたっぽ、おっぱなして、うちへかえったと。

ほうしたら、けらいのしゅが、あわぼこのおいていった、かたっぽのはきものを、殿様にさしだしたら、「あの娘は、いずれ、このあたりのものにちがいない。このおいていったはきものをたよりにして、このはきものに足のあう娘をさがし出してくれ」て殿様がいわしたと。

ほうして、けらいのもんが、そのかたっぽのはきものをたよりにして、あたりの村々をさがしあるいて、とうとうあわぼこのうちへやってきたと。

「ここのうちの娘に、このはきものを足にあわせてもらいたい。はきものにピッタリあった娘だけや、殿様の嫁にしたい。」

ほうしると、後家どんは、こめぼこを、殿様の嫁にやりたくて、そのはきものにあわないこめぼこの大きな足を、カミソリできって、はかせようとしたとこが、こめぼこがいたがって、ワッと泣いたって。(中略)

後家どんは、しかたなく、あわぼこをつれてきて、そのはきものに足をあわせてみたら、ちょうどいいあんべに、そのはきものをスッポリとはかれたと。――

要するに、祭の日に棧敷で芝居を見ていて、見染められたのは、どちらの娘かということが証拠立てられたら良いわけであるが、《はきもの》と言った場合には、日本の非個性的な下駄や足駄や藁ぐつなどが連想されるので、上記の民話の靴についての発想は不自然の感があり、明治以降、グリムの『灰かぶり』(シンデレラ)の影響によって改変されたものであろう。

とにかく、我が国の粟福米福型には、或る特定の者の足にしか合わない靴⁽⁹⁾は、素材として殆んど採られなかった。これは、わが国の下駄・足駄・藁靴などの履物は、同じ年輩の者ならば誰の足にも入るように造られていたことを想起すべきである。従って、上掲の六日町上薬師の『こめぼこあわぼこ』（昭和34年採取）の話は、水沢謙一氏著『越後のシンデレラ』に収められた75話の中でも、例外的なものである。

すなわち、この75話中、特に《はきもの》というような漠然とした言葉を使っているのは、上記の例の外には、東頸城郡松代町松代の『ベンズルカゲズル』の中の

山のばさからもろてきた小箱にたのんで、「いいきもん、出れ」「くし、出れ」「はきもん、出れ」とみんな出して、ほうしてめかしこんで、しばい見にいったと。
などの例くらいのもので、殆んどみな下駄又は足袋になっている。

六日町上薬師の『あわぼこ、こめぼこ』も既に引用したように、みな《はきもの》となっているが、この前に、次のように唯一回《くつ》となって出てきたのであるが、後で《はきもの》と改めてしまったのである。

・また、小箱にたのんで、「かんざし、くし、出てくれ」「赤いきもの、おび、出てくれ」「たび、はきもの、出てくれ」「かご、出てくれ」「かごかき若いしゅ出てくれ」っていうたら、それがまた、んな、出てきたって。

ほうして、あわぼこは、かんざしさしてくしさして、赤いきもんきて、おびしめて、たびはいて、くつはいて、りっぱにきかざって、ほんとね、いとしげな娘になったと。ほうして、きれいなかごにのって、かごかき若いしゅにかつがれて、お祭ばにいったと。

上記のように、最初《はきもの》としながら、途中で唯一回だけ《くつ》とし、それ以後は何回もみな《はきもの》として通している。これは、「くつはいて」と言っではみたが、その前に「たびはいて」ともあるので、何となく不自然だと感じたものか、その後の文では、すべて《くつ》とも《げた》ともつかない《はきもの》という言葉で押し通してしまった。

「何々が足にぴったり合う」という場合に、この《何々》は靴か足袋でなければならない。というのは靴や足袋は足の寸法に合わせて造られているが、下駄・足駄・わらぐつ（その他日本古来からの沓）などは融通性を考えているので、似た年齢の者の誰にも流用が可能であった。従って、この場合に、わざわざ《はきもの》という言葉で、最も大切な所を逃げたのは、靴では《昔話》に相応わしくないことに気がついていたことであろう。（なお、この語り婆は、「たびはいて、くつはいて、……」と言ったものの《たび》に《くつ》は変であると気がついて、《はきもの》でごまかそうとしたものとも考えられる。）

粟福米福型の民話の中でも、六日町上薬師の『あわぼこ、こめぼこ』だけに唯一回《くつはいて》という言葉が出て来、話の内容もグリムの『灰かぶり』（シンデレラ）によく似ているが、靴に足を合わせる肝心の所では、《くつ》ではなく、漠然とした《はきもの》となっていることに対して、私は非常に不自然であると感じた。

それで、シンデレラ型の越後民話の研究者たる水沢先生に、『あわぼこ、こめぼこ』にだけ靴がでてくるので、これは例外的なケースと考えられるが、或はこの他に《くつ》の出てくる民話があるのであろうか、どうであろうかとお伺いしてみた。

水沢謙一先生からの御示教によると、先生の御著に『雪国の夜語り』（昭和43年、野島出版）の中に、(三)『ヌカ、コメ』(四)『スズムシマツムシ』という話が載せられてあり、これ等には《くつ》や《たび》が扱われているとのことであった。

下駄は、これを履く場合、融通性・流用性のあるもので、特定の個人専用のものとしては変である、しかも《はきもの》という意味内容の漠然とした物を持ち出して、「ぴったりであった」

というのも変である。

一体、語り人は《はきもの》にしても、脳裏に何を描いていたのか。これを明確にしたのが、『雪国の夜語り』の中に収められている『ぬか、こめ』であって、昭和40年に長岡市成願寺町で採取された話である。この話では、《はきもの》や《下駄》《くつ》ではなく、特定な者にしか合わない日本的な履物たる足袋が採りあげられている。

すなわち、ぬかがあまり気を揉んで帰ろうとしたので、片方の足袋が脱げてしまったが、急いでいるので、それを其の儘にして家へ帰ってきた。（以下、シンデレラの靴合わせのシーンに相応する条を、この話の中から方言のまま示してみると次のようである。）

ほうして、それから、ある日、殿様がこらして、「お祭の日に、このたびをはいてた娘が、ここんちにいねか。その娘をよめにほしい。」といわしたてや。かっかは喜んで、「お祭にいったのは、おらとこのコメでござんす。」と、たびをはかしてみるも、いっこうにあわねと。

「そいじゃ、こっちの子にはかしてみれ」

「いやいや、この子はスカてがで、お祭にはいがね。」「なんでもいいすけ、たびをはかせてみれ」ほうしたら、そのたびが、ピッタリと、スカの足にあったと。

すなわち、足袋は近世日本習俗特有なものと思われるので、これは民話の日本的改変の一つの行き方であろう。

この型の一番新しいのは、長岡市西蔵王町で採取された「スズムシ、マツムシ」であって、昭和42年に書き留められたものである。

私は前に、六日町の「あわぼこ、こめぼこ」の中の——後家どんは、こめぼこを、殿様の嫁にやりたくて、そのはきものにあわない、こめぼこの大きな足を、カミソリできって、はかせようとした。——右の「はきもの」という語からは、非個性的な下駄や足駄が想起させられて、この発想法が日本習俗としては不自然であると言ったが、この型の最も新しい民話の「スズムシ、マツムシ」では

・殿様は高い上にあがって、こう、見ていらしたてんがの。ちっとめえると、スズムシのとこへ、くつやがきての、スズムシの足のすんぼうをとって、また、だまっていってしもたてんがの。となっているが、これは明らかに近代的意識をもって、無意識的にか、この種の民話の一部を改作しているものであり、特に、この話の結末において、

- (1) 継母が、その実子のマツムシに、その靴を無理に履かせようとして、小刀で足（踵）を削り、痛がるのを我慢させて靴をはかせて駕に乗せてやる。
- (2) 松の木の上から、鳥がその駕を見下して、「カゴの中の娘のあくとガァガァ」と鳴いて、マツムシが偽者であることを知らせて、駕を引返させる。

上の二か所は、グリムの『灰かぶり』のそれと殆んど等しく、(1)は昭和34年採取の六日町上楽師の『あわぼこ、こめぼこ』にも既に見られたところであるが、(2)は、この42年に採られた『スズムシ、マツムシ』に初めて見るものであり、この部分は語りばさによって、その後、更に附け加えられたものであろう。それも恐らくグリムの『灰かぶり』の影響によると考えられる。

すなわち、「靴屋に足の寸法を取らせる」というような発想は、古くからの伝承というよりは、グリムの『灰かぶり』の靴合せを、わが国の民話にも生かそうとしている苦心の跡が窺われる。これを時代的に考えても、不自然であることは、次の文面からも読みとれるであろう。

・ほうして、それから四、五日もめえると、殿様のけらいが、くつをもってきて、「このうちの娘を、殿様が一ばん気にいったすけ、よめにほしい。いついつに、かごをもって、むかいにくるすけ、このくつをはいてきてもらいたい。」

いかなる靴にせよ、駕籠と靴とが自然的にマッチするであろうか。

又、この『スズムシ、マツムシ』の、もう一つの特異点は、宝の小箱や打出の小槌などが出てこないことである。即ち、ここでは、後妻から暇を出されたスズムシのばあやは、スズムシに代って仕事をやってくれたが、スズムシに宝の小箱などは与えなかった。従って、他の娘達が皆盛装をして殿様の所へ集まっているのに、彼女だけが普段着で行かざるを得なかった。

これは、マジックと幻想の消失であり、ファンタジーの消滅を物語っているものである。

このように合理性を追い、現実的になっておりながらも、なお、想像性に富み幻想性の豊かな西欧のシンデレラ民話に、形式の方面にだけ次第に接近してきているところに未だ考察の余地が残されている。

V フィナーレ

グリムの『灰かぶり』の中の三人の娘が、その足を上靴に合わせる条は、冗漫なメルヘン的な同じような話の繰り返しになっているが、この個所がペローにおいて、どうなっているかを見るに、二人の姉の場合の叙述は、次のように極めて簡潔になっており、

- ・（その上靴を）サンドリヨンのふたりの姉さんのところへも持ってきました。ふたりはなんとかして足をくつにいれようと、いろいろやってみました、どうしてもはいりません。

サンドリヨンについては、

- ・サンドリヨンは、自分の上ぐつだとわかりましたので、ほほえみながらいいました。「このくつが、あたしにあうかどうか、はいてみたいわ！」

姉さんたちは笑いだして、サンドリヨンをからかいました。くつをためす役をしていた役人は、サンドリヨンをじっと見ていましたが、この娘が美しいのと、どの娘達にもためしてみるようにと命令を受けているので、はいてみさせようといいました。

役人はサンドリヨンをこしかけさせて、その小さな足にくつをあててみますと、足はぴったりとくつにはいて、ろうでくつつけたようにあいました。

姉さんたちは、すっかりおどろいてしまいました。

とあり、サンドリヨンの申し出に対し姉さんたちが笑い出してからかったというのも、後になって彼女達の驚きが、いかに大きかったかを利かせるためであり、このことは更に次のようなサンドリヨンのしぐさによって効果的にされている。

- ・けれども、サンドリヨンがポケットから、もうひとつの上ぐつをとりだしてはいたときは、さらにいっそうびっくりしました。

そして、上に示した

- (1) 「このくつが、あたしにあうかどうか、はいてみたいわ！」姉さんたちは笑いだして、サンドリヨンをからかいました。
- (2) （サンドリヨンの）足はぴったりとくつにはいて、ろうでくつつけたようにあいました。姉さんたちは、すっかりおどろいてしまいました。
- (3) けれども、サンドリヨンがポケットから、もうひとつの上ぐつをとりだしてはいたときは、さらにいっそうびっくりしました。

という三つの条は、三文相重なって、急転的に次の三人の激情的の行動に変じて、最後のクライマックスを形成しているのである。

- ・ふたりの姉さんも、舞踏会でおめにかかった美しいお姫さまは、サンドリヨンだということがわかりました。ふたりはサンドリヨンの足もとに身をなげだして、いままでいろいろひどいめ

にあわせたことをわびました。

サンドリヨン^①は、ふたりを立ちあがらせて、キスをしながら、心からゆるすといい、これからも、ずっとなかよくしましょうといいました。

これらによって、ペローの作品が、いかに劇的に構成されているかということや、サンドリヨンの美德を、その優しい言葉や行為によって表現しようとしていることが知られ、単なる継子いじめの民話などから遙かに超脱した洗練されたものになっていることが知られる。

然るに、グリムのシンデレラの結末はどうであろうか。植田敏郎氏の新潮文庫『灰だらけ姫』の解説によると、現在の『灰だらけ姫』は1812年にグリムが聞いたものであって、最初の「帽子に触れた小枝」と「鳩の歌」と、話の最後は1819年に新に加えられたものとされているが、その最後というのは、『グリム童話集』の金田鬼一氏の訳(岩波文庫)によると、次のようになっている。
・花むこ花よめが教会へ行く段どりになると、姉は左に、妹は右につきそっていました。すると二羽の鳩が、めいめいから目だまを一つずつ啄きだしました。

お式がすんで、教会から出てきたときには、姉は左に、妹は右につきそっていました。すると、二羽の鳩が、めいめいからも一つの目だまをつつきだしました。

こんなわけで、ふたりの姉妹は、じぶんたちが意地わるをしたばかりに、ばちがあたって、一しょうがい盲でいることになりました。

この部分は、恐らく、グリムがドイツ国民の嗜好に合うように付け足したものであろう。このことは、グリムの『赤ずきん』とペローの『赤ずきん』の結末の比較によっても知られることである。

即ち、ペローの作においては、サンドリヨンは、「今迄いろいろとひどいめに合わせた二人の姉」であっても、「サンドリヨンの足もとに身を投げ出して」詫びたのに対し、これを「心から許す」と言い「これからも、ずっと仲よくしましょう」と姉達にキスをしているが、グリムにあっては、シンデレラの結婚式に花嫁の附添いになっている姉達をも「おべっかをつかって、福を分けてもらうつもりでいる」として、最後に教会をもち出して、このような結末としたのは、今迄シンデレラをいじめてきた二人の姉達に、飽く迄も神の最後の審判を行なおうとしたものであろうが、この鳩がシンデレラの亡母の墓に挿された榛(はしばみ)に由来することと併せて考えてみると、これは素朴な絶対的信仰の変形した一種の念力、執念又はニーベルンゲン^②的な報復の現われとも見られよう。

このことが、決して私の思いつきや附会でないことは、相沢教授の『メルヘンの世界』の中の次の一節によっても領かれることである。

「悪役の残酷な刑罰にヒーローやヒロインが直接手をくだすことはない。誰か明らかでない第三者が行ない、ヒロインは傍観する形である。処罰する主体が明確でない第三者というのは、無意識のうちに、聞き手なり読者なりをこれに参加させるための深い配慮とも考えられる。」

(相沢 博『メルヘンの世界』96p.)

つまり、これらの民話のフィナーレを如何にするかということについては、作者又は改作者を介して、その国の人々も参加していると考えられるし、なお、相沢教授は同書に、「グリム童話はドイツのすべての哲学者の全著作以上にドイツ人の世界観を知る絶好の資料である」と述べておられるが、これはドイツの童話に限らず各国の童話(民話を含んで)に当てはまることであろう。

さて、それでは、水沢謙一氏の『越後のシンデレラ』に収められている民話や、その他一般の昔話書に見られる「栗福米福」型の民話の結末はどうであろうか。勿論、これらの中には、最後がハッピー・エンドになっているものもあるが、然うでない話の中から、継子が目出度く結婚し

た後の継母や、その実子について述べた代表的なものを抜いてみると、

(1) あわぶくこめぶく 中蒲原郡村松町田中

そのあとで、かかが「こめぶく、こめぶく、お前はなにしてもろくなことをしない。お前のようなものは、だれも嫁にもらい手がない。うすの上にでもあがりやがれ」、そういうて、うすの上にあげて、おしくったたら、こめぶくは、うすの下になって、いきがたえて死んでしもたてんが。

(2) あわぼこ、こめぼこ 南魚沼郡大和町辻又

こめぼこが「おらもおかごにのって、嫁にいぎたい」っていうども、だれも、こめぼこを嫁にくれっていうもんがないんだんが、かっかがやきやきして、「お前のようなもんは、このこいかごにでものれ」って、こめぼこを、こいかごにのせて、しまいには、つつみのなかに投げこんだ。

(3) あわぶく、こめぶく 栃尾市森上

ほうしたれば、おっかさまが、ごうやいて、こめぶくのことをはだかにして、「んなのようなばかもんは、どこにもいねよ、こうしてくれる」って、うらのいどのなかへ、ドボコンとぼんげたてんがない。ほうしたら、こめぶくは、いどのなかへ、ズブズブとしずんで、死んでしもたてんがない。ほうして、おっかさまも、しんけになって死んでしもたてんがない。

[以上(1)(2)(3)の引例は、水沢謙一氏『越後のシンデレラ』による。]

(4) 米ぶき・栗ぶき 秋田県鹿角郡

栗ぶきは、これ（継子の米ぶきが立派な衣裳をつけて、駕籠に乗って嫁に行く姿）を見て、たいそう羨しがって、「おれも駕籠さのって、嫁に行きたいなあ」といったが、誰も貰い手がありませんでした。母親はうらやましがって、栗ぶきを臼にのせて、田の畔を引っぱって行きました。臼がごろごろとこころげて、ふたりとも田の中に入ってしまった。そして、「うらやましいであ うらつぶ」と歌いながら、つぶつぶとそのまま水の中に沈んで、ふたりはうらつぶ（宮入貝）になってしまったそうです。

[(4)の引例は関敬吾編『日本昔ばなしⅢ』（岩波文庫本）による]

これ等によって、結末を考えてみると、ドイツ民話における死んだ母親の亡霊・執念或いは神の最後の審判などというものとは異なって継子栗福（秋田民話では米福）だけが幸福な身の上になりわが子の米福が後に取り残されたのを見た継母は、羨望と嫉妬とで、《やきやき》して精神錯乱状態となって、嫁入駕籠の代りに、わが娘を肥籠（又は臼、ソリなど）に乗せて引き廻し、遂に死に致らしめ、自分自身も狂気になって、結局、親子諸共に自滅という形をとっている。

これは、私共に我が国の母子心中などを思わせるものであって、残酷なことは残酷であるが、グリムの結末のように、血生臭い感じはせず、端的に言うなら自暴自棄であり、やけのヤンパチであり、一種の玉砕でもあろう。確かに庶民的な玉砕である。

ただ、栗福米福型の民話の悉くが、このような結末になっているわけではない。

Ⅵ 結 語

継母が継子を憎み、自分の産んだ娘だけを可愛がり、舞踏会とか祭の時の芝居とかいう娘達が結婚の機会を得ることのできるような催し物があつた時に、継子の其処へ行くことを妨げて、自分の実子だけに着飾らせて出してやったに拘らず、そこへ行かせられなかった継子に同情する者が現われ、その者が与えたマジック的な力によって、良い結婚の相手を得、実子の方が、その母の意地悪さの報いによって、反って不幸になるという、いわゆるシンデレラ型の民話は、昔から

世界の各国に分布している話であって、これらは人間の感情の自然的必然性から、恐らく最初は、各地に無関係に発生して、伝承されてきたものであろうが、途中において、そのうちでも特に興味ある民話が、他の民話に何らかの影響を与え、次第に話の筋の細かい点にまで、似たような趣をもたせるようになることは、本稿の仏独民話とわが国の多くの民話との比較によって、これを明らかにしてきたところである。

しかし、或る国の民話が、他の国の民話の影響によって改変される場合には、その国の慣習や国民的嗜好に叶うように屈折させられ易いので、本筋に深い関係のない細部においては、かなり違ったものになっており、幼児向の絵本や、児童の読物においては、それらの部分が一般に教育的な立場から、省略又は改変されているために、民話の比較研究の対象にはなり難いものである。

管見をもってすれば、同じような型の民話の如何なる部分が、それぞれの国によって改められているかということと比較考察することは、その国民の世界観や文化・風俗等を対比的に明らかにする絶好の資料であり、民話が特定な文学者の作品というよりは、大衆の意向を承けた作者の所産であり、大衆の伝承の間に形成されたものであることに思いを致すなら、本稿各章の所論は世論的眞実の一種の解明とも言われるのではあるまいか。

文豪の作品は、その文豪の高邁な思想に立脚して、人類の理想や人倫的な《立て前》が、その中心に据えられているのが一般であるが、その作品には、往々にして、見てくれがしのところが発見される。これに反し、国民大衆の意識や嗜好から生まれた各国の民話は、それぞれの風土や歴史によって育成された、その国民の《本音》とするものを色濃く宿している。

フランス・ドイツ・日本のシンデレラ型の民話の比較研究も、その本音を明らかにする一つの方法と考えられるが、本稿は、その試論の一部分であって、なお、残された問題については次の機会に譲りたいと思う。(昭和46. 6. 30)

〔注〕

- (1) イザヤ・ベンダサン著『日本人とユダヤ人』などのような書
- (2) シャルルペロー『眠れる森の美女』（角川文庫）
江口 清訳
- (3) 金田鬼一訳『グリム童話集』（岩波文庫）、関・川端訳『グリム昔話集』（角川文庫）
- (4) 羨望礼讃……美しくお姫様のように見えた、宮殿におけるサンドリヨンに対する羨望礼讃。
- (5) 波多野・島田監修『世界の児童文学』（国土社）
- (6) つげぼくろ……これについては、丹野 郁著『西洋服飾発達史近世編』（光生館）の「フランス女子の服装」の項に次のように記されている。

・新奇な流行として、世紀（17世紀）の後半になってつげぼくろが現れる。これは皮膚の光沢を増し顔色を美化するという美颜法で、黒ピロードやゴム引された黒絹などを小さく切って顔にはりつけるのである。貴婦人たちは、美しくみせたい所には、どこでもかまわず、丸いものや細長いもの、巾広いもの、星型などさまざまな形のものをはりつけて楽しんだものである。

そして、はりつける場所に応じて名称をつけていた。名称は国によって一様ではなかったかも知れないが、一例をあげると、

- ・眼 の 端——パッションネート (passionate)
- ・唇 の 端——キッスイング (kissing)
- ・鼻 の 上——ソースイ (saucy)
- ・額 ——マジェステック (majestic)
- ・頬 の 中 央——ギャラント (gallant)

・眼の下——マーダラス (murderous)

・えくぼの所——プレイフル (playful)

。フランスでは、後で直ぐはぎとることのできた自由自在な「つけぼくろ」であったが、近世日本の吉原等では、愛人同志が互いに相手の名を腕に刺青 (いれずみ) をした。これを関西では「入れぼくろ」と言っていたが、これは、フランスの遊戯的なのに対し、殆んど命がけでやる場合が多く、刺青であるから一生抜きとることができなかった。両国の気風の相違が窺われて面白い。「入れぼくろ」について詠まれた江戸川柳に「母の名は親仁の腕に萎びてゐ」(宝13礼3)とあり、堺の瓦竹堂李坡選の『明石人丸大明神三万句集』の中に、「青黒う父の腕に残る母」「文字に黥よりし病後の入れぼくろ」などの句が見られる。

(7) 水沢謙一著『おば婆の昔ばなし』(昭和41年, 野島出版)

(8) 類話……………水沢謙一著『越後のシンデレラ』(昭和39年, 野島出版)の中に約75の類話が収められている。

(9) 靴……………昔の日本の沓(くつ)は、現代の靴とはかなり異なっており、だぶだぶして大人なら誰の足にも合うようなのが多かった。又、江戸時代の女は靴を穿かず、近世風俗史などを調べてみても靴屋というものは見当たらない。

(10) 水沢謙一著『雪国の夜語り』(昭和43年, 野島出版)

(11) グリムの「灰かぶり」(シンデレラ)……………大正時代に英訳本が盛んに刊行されていた。

(12) ニーベルンゲンの報復……………: 中世ドイツ文学の中の叙事詩の代表作に見られる, グンテル王の妹クリームヒルトの執拗・凄惨・壮烈な仇討。

(13) こいかご……………こえかご, 即ち肥籠の発音からきた誤であろう。

(14) ペローのガラスの靴とグリムの黄金の靴なども, フランス好みとドイツ好みの象徴のように思われるので, これらの比較研究なども面白いと思う。

(附記)。フランスのペローの民話では、シンデレラの名はサンドリヨンとなっている。